

支那の商業及び商慣習

(三六) 三六

栗 山 茂

は し が き

支那商人氣質

支那商業の種類

組織別による種類

業別による種類

買辦について

商業團體

會 館

公 所

公 議 會

支那商慣習

要 言

は し が き

今次支那事變勃發してから正に五年、我が勇敢なる皇軍は陸に海に將又空に赫々たる戦果を擧げ、既に支那大

陸の重要都市は殆んど我が軍の占據するところとなり、新支那建設の工作は着々實行されつゝあるが、頑迷なる重慶政府は専ら第三國の援助により今日尙執拗に抗戦をつゞけつゝあつて、事變はいよく文字通りの長期持久戦に入り、戦は何時果てるとも見えず、一方又太平洋の波、漸く高からんとして暗雲低迷、今や支那事變の解決はおろか、戦は更に太平洋上に波及せんとして、東洋の天地は陸に海に一大波瀾を捲き起さざれば已まざるの形勢にあり、平和の曙光は近き將來に於ては到底見ること難き状態にある。

然し乍ら新支那に於ては既に沍精衛を主班とする中央政府は昨年四月南京に成立し、爾來今日に至るまで約一ヶ年政府の基礎やうやく堅く、内政に外交に着々新政策を實行して、新支那建設は固より、東洋平和確立の爲に我が國に協力しつゝあるは洵に喜ばしいことゝ云はねばならない。更に昨年十一月三十日、我が阿部全權との間に日支基本條約が締結され、茲に日本が始めて正式に南京政府を承認すると共に日滿支三國の關係が明確に規定さるゝに至つたことは、何と云つてもこの事變處理の上に一步を進めたものといふことが出来る。

條約の内容は大體近衛聲明の三原則、即ち善隣友好、共同防共、經濟提携がその中心となつてゐることは申す迄もないが善隣友好、共同防共については暫く措き、單に經濟提携について言へば、先づ日支兩國は長短相補ひ有無相通づるの趣旨に則り、平等互惠の原則に基いて緊密な提携をなすことを約束すると共に、特に蒙疆及び華北に於ける特殊資源、就中、國防に必要な埋藏資源の開發については兩國が互に協力することを約束してゐるのである。

日支兩國の經濟提携は兩國の生存上絶対に必要である。しかしその實現は仲々容易ならざるものがある。殊に支那に於ては今尙戰爭が續行中であり、而も我が軍の占領地區内と雖も治安の確保未だ充分でない今日の狀態にあつては、その實現は一層困難であらうことは想像に難くないが、東亞新秩序建設の爲には萬難を排してこれが實現を圖らねばならない。現に我が軍は一方に於て戰爭を遂行し乍ら、一方に於ては又凡有る困難を排除し、幾多の犠牲を拂ひつゝ資源開發に努力しつゝあるのである。今後治安の漸次恢復するに従ひ、日支の經濟關係は益々密接の度を加へ、彼我の貿易も一層盛んに行はれるであらうし、又大陸に渡つて直接商業に従事するものも年と共に多きを加へるであらう。その何れにしても相手は支那四億の民衆である。それ〴〵民族の異なるに従つて、異つた民族精神や民族性を有して居り、又風俗、習慣の上に於ても大分變つた點が発見される。昔から「郷に入つては郷に従へ」といふことがある。やはり支那人を相手に仕事をするのには、どうしても支那及び支那人を知ることが何より必要なことである。殊に支那人と貿易し、或は支那に於て商業に従事せんとするものは、どうしても彼等傳統されて來た習慣を知悉しそれに對處することが必要である。

單に支那本土に於てのみならず、今日所謂東亞共榮圈内に含まるべき佛印、泰國、或は蘭印諸島に於ても、支那廣東、福建地方より移住せる華僑は其數數百萬を算し、其の地方に於ける商權は殆んど彼等の手中にありと云つても過言でなく、而も彼等は支那本土に於けると同様の商業組織を有し、又同様の商慣習によるものが多いから、將來我々が南洋方面に發展を志す場合でも、一通り彼等の商業組織や商慣習について知つて置くことは必要

なことと思ふ。

商業、商業習慣といつても千差萬別、夫々商業の種類により、又地方によりて異つてはゐるが、大體都市に於て行はるゝ共通なものについて、その概略を記して御參考に供したいと思ふ。

支那商人氣質

支那商人も支那人である以上一般支那人の有する特質を有することは言を俟たないが、こゝでは只單に一般的な支那商人の氣質について述べ、併せて地方商人の特色について述べることにする。

支那に於ける商業の起源は遠く神農の昔にありと云はれ、已に商、周の時代に於ては相當盛んとなつてゐたが、近世海外との交通が開けてより、商業の發達見るべきものなく、遂に歐米先進國と伍して世界商戰に立ち打ち出ななかつた所以については、これを各方面から觀察出来るが、先づその第一は何といつても永年その傳統的政策として採り來つた重農抑商の政策にあることは何人も否定することの出来ない事實である。即ち支那は古より以農立國を以て國の大本とし、自給自足經濟政策によつて來た關係上、農業を獎勵し、農を尊重するに反し、一方商業を四民の最下位に置きたることを以てしても明かなる如く、古來支那に於ては（我が國も同じだつたが）商を賤むる風習が行はれ、これが商業の發達を阻害する有力なる原因となつてゐる。しがし乍ら、彼等支那人は先天的に商業國民とも云ふべく、商業上一種獨特の長所を有し、商機を見るに敏、宣傳廣告には妙、又懸引に拔目

のない點など到底他國人の及ばないところである。

しかも貨殖の道に巧みに、能く零細な財を積み、勤勉にして困苦に堪へ、且又商人間に一種の習慣的制裁が行はれてゐるので、信用取引の美風意外に堅く、國家としては常に財政的窮乏といふ隣むべき状態にあるに反し、個人としては大賈富商たる處に存在し、所謂地方の財閥に至りては、巨萬の富を藏するもの多く、その勢力實に侮り難きものがある。殊に海外に於ける華僑の大部分は商業に従事し、茲數年來稍不振の状態にありとは云へ、彼等の經濟的勢力は仍ほ牢平として抜くべからざるものあることは世人周知のとである。

支那人は地方に依つて其技能を異にし、各地夫々特殊の性能、技術を有してゐるものが多い。

山西人はその地勢上山が多く、地味が瘠薄で、大部分高原地帯となつてゐるので農産豊ならず、爲に勤儉貯蓄の念強く、『老西兒捨命、不捨財』といふ諺がある如く、金錢を愛すること生命に於けるが如く、冷靜事務に當つて情實に拘泥せず、銀行家若くは質業者たるに適してゐる。殊に彼等は數百年間の力行節約によつて、貯へた資財を以て、各地に票號即ち爲替銀行を設立し、支那内地に於ける爲替事業を獨占した。北支那、滿洲等に於ける銀行や質屋の、支配人及び使用人中には山西省出身に係るものが頗る多く、其票號が革命兵亂によつて資産を蕩盡するまでは、支那經濟界に一大勢力を爲してゐた。

之に次ぐものは廣東人である。度東人は夙に航海業に従事し、唐宋時代から外國人と交渉することが久しかつた爲最も海外事情に通じ、その性質豪快敏捷にして巨額の資本を運轉して、商機を捕捉するに巧妙であつて頗る

對外事業の經營に適してゐる。従つて彼等は外國貿易商及び外國商館の買辦として各開港場に於て雄飛するのみならず、其労働者に於ても汽船の水夫、船渠及び機械工場の職工として活動する者が多いので、清朝の末迄は山西人と相並んで支那經濟界の二大勢力と呼ばれてゐた。

寧波人も亦古來海運業に従事し、十六世紀の頃葡萄牙人と貿易し、殊に上海開港以來は續々此地に移住して外國人と接觸することが極めて多くなつたので、廣東人の有する技能は殆んど彼等も有してゐた。又彼等は思慮周密にして質朴、外觀を飾ることなく、孜孜として貨殖に従事するので、銀行家として適當である。之を簡単に云へば、寧波人は廣東人と山西人とを折衷したやうな人物で、清朝時代に於て廣東、山西兩省の間に介在して隱然敵國をなしてゐた。

其外紹興人は頭腦が法理的に出來てゐて文筆に秀で、居たから、清代大小官吏の幕友、各役所の胥吏となり、公文書類の起草、裁判、財政の顧問や、諸公務に従事した。山東や江北は土地疲瘠、加ふるに水害が多いので、此等の地方人は各地に出稼を試み、滿洲地方に於ける力役とか、上海に於ける下級の勞働に従事してゐる。北京について之を見るに、水汲人は山東人で、俳優は安徽人多く、銀行家は山西人、裁縫師は南方人であると云つて過言でない。

要するに、その何れの地方の商人たると、又何れの商業に従事するとを問はず、彼等商人は商業場裡にありては機智縱横常に胸中成算を藏して從容として迫らず、謙遜にして社交的、一見するに射利の念など毫もないやう

に見えても仲々抜け目のないのが彼等商人である。

しかし一方彼等商人社會に於ては嚴重な制裁規約があり、これが嚴格に行はれ、相互能く情誼を重んじ、共同の利益を圖つて相犯すことなく、互に相倚り相助けて共存共榮の實を擧げてゐる點は何といつても彼等支那人の長所といへやう。かくてこそ彼等は何等本國の保護を受けず、一方絶えず異民族の壓迫を受けながらも今日世界の各地にあつて商業に従事し、大いに成功を収めてゐる所以であり、商賣敵の故を以て常に相陥れんとしつゝある我が海外にある商人の氣風とは全然その趣を異にするものである。

支那商業の種類

支那に古くから三百六十行といふ語がある。「行」は商賣といふ意であるから、即ち三百六十種の商業を意味するものであるが、必ずしも嚴密に三百六十種の商業があつたといふ意味でなく、唯多くの種類があつたといふことを表はした語に過ぎない。元來この「行」といふ字は支那では間屋といふ意味であるが、昔は我が國でもそうであつたやうに、同種の商賣人が町の一定の地域に集つて營業をやつてゐたもので、即ち何町筋は呉服屋許りといった風に、同じ商業を営むものが軒を並べてゐたことから、この「一列」並び」といふ意味から轉じて大きな商店といふ意味に變化したのである。我々が日常使用する銀行、洋行などの「行」もこの意であり、銀行は金融を掌る店、洋行は支那に於て開設する外國の商館といふ意味である。

事實三百六十種はないにしても世の中が複雑になればなる程色々新しい商賣が生れることは事實で、現に我が國で營まれてゐる商賣だけについて云つても、これを仔細に分類すれば随分夥しい數に上るであらう。今此等の夥しい商業について一々説明することを避けるが、支那に於ける商業を組織形態の上から分類すれば次の四種となる。それは一、個人經營 二、公司組織（會社組織） 三、合夥組織（組合組織） 四、合辦組織である。個人經營は何れの國に於ても大した相違はないからこゝでは省略する。

組織別による種類

公司組織（會社組織）

支那に會社組織の入つて來たのは我國よりは古く、其起源については英國人の支那に於ける會社經營に倣つたものである。例の廣東貿易に従事した英國王の特許會社、東印度貿易會社が「公司」と稱へたのに始まるものと考へられてゐる。然るに現今支那に於ては固有の合夥（組合）組織によるものに對しても漫然公司の名を冠し、時としては個人營業に對してすら此の名稱を呼ぶものがある。

然し前清末の光緒二十九年（一九〇三年）欽定大清商律が出來、その公司律（日本の會社法に當る）に於て初めて法律上の用語となつたので、其の第一條には單に「湊集資本」其營業貿易者、爲公司、其分四種、一、合資公司 二、合資有限公司 三、股份公司 四、股份有限公司」とのみ規定し、公司そのものの定義に於て法人とも

團體とも言はず、其他の措辭頗る漠然たるものであつた。

次で革命後の民國三年（一九一四年）北京政府公布の公司條例に於ては、其の第一條に「本條所稱公司、謂以三商行爲業、而設立之團體」と規定するに及んで、頗る明瞭となつた。斯くして公司是法人であり、而して外國人も亦支那法の下に公司と關係し得るを以て、支那人と外國人の關係する支那法人とは判然區別し得、從つて外國人と雖も支那法に遵據して公司を組織し、支那各地に於て事業を經營し得ることになつたのである。

斯くして十數年を経過したが、國民政府成立するに及んで、同民國十八年（一九二九年）十二月二十六日新に公司法二百三十三條を公布した。然しその第一條に「本法に公司と稱するは營利を以て目的と爲し設立したる團體を謂ふ」といひ、第三條に「公司是法人とす」と規定したるのみならず、同第二條に於ける公司の種別に前記民國三年の公司律と同様である。即ち「公司を分ちて四種と爲し」（第二條）、左の如く別けてゐる。

一、無限公司（日本の商法上の合名會社に當る）

一、兩合公司（合資會社）

三、股份有限公司（株式會社）

四、股份兩合公司（株式合資會社）

これ等の公司の性質等に關しては已に公司條例の公布せられ、また關係法規の制定せられてゐるのみならず、日本其他外國のそれに摸擬して制定せられたものであるから今特に詳述することをしないが、其の設立に就き、

(一) 無限会社の設立には股東(株主)二名以上あり合同して章程(定款)を作成、署名捺印し、各人各一通を所持することを要す。(第十二條)

(二) 兩合公司は無限責任股東と有限責任股東とを以て之を組織す。有限責任股東は出資定額を以て限度とし公司に對し其責を負ふ。(第七十條)

(三) 股份有限公司は七人以上の發起あることを要す。(第八十八條)

(四) 股份兩合公司の股東は少くも一人無限責任を負ふものあることを要す。(第二百十六條)

又股份(出資持分の意にして、日本の合資會社の社員持分、株式會社の株式等孰れも此名稱を用ふ)に就て股份有限公司の資本は股份に分つことを要し、每股份の金額は一律なるべく、二十圓より少きことを得ず、但一時に金額を拂込むべき場合は十圓を以て一股(一株)と爲すことを得と定められてゐる。元來支那固有の合夥(組合)組織等の慣習上、分割拂込制度に慣熟せず、従つてかゝる場合は動もすれば第一回拂込を爲せば已に義務を了したかの如く考へ、殘額拂込の意思などの毛頭存せざる場合もあり、且現在の社會經濟狀態よりして額面五十元以上と稱するが如き多額を規定するよりも寧ろ五元、十元の少額を認むるを可とすとの議論も從來行はれ來るより、却つて此の新公司法に於て右の如き少額を認めることとなつたものと思はれる。

以上支那の會社組織についてその概要を述べたが、支那に於ては由來會社組織の企業形態はその發達遅々として進まず、従つて大資本を擁する大規模の企業の起らないのは當然である。支那産業の振はない原因もその一つ

はこの會社組織の發達しないことによること勿論である。その發達しない原因については色々考へられるが、その有力な一つの原因と見るべきものは、何と云つても支那は元來農業國で資本の蓄積が乏しく、且金融組織の不發達から企業資金を求めることが容易でない。又資産を有し投資を試みとするものも比較的安全なる合夥組織に投資する傾向あること。その第二の原因としては、支那は極端に個人主義の發達してゐる國であるから、公司经营に當る重役は一般に公共心に乏しく責任觀念薄く、往々にして私利不正を營み、然らざる者は、その才能が概して大規模の經營に適しないこと。又企業の従業員も一般に公共心を有せず上下共に私利を圖る風習があること。更に又これは單に社員採用の時計りではない、官吏の場合も同じことであるが、支那の古くからの悪い風習として、一つの會社なり、役所なりを自分の一族郎黨、親戚知己で以て固めやうと計る慣習が行はれてゐる。例へば或る會社の社員は殆んどその社長の親戚縁者許りであるといつたことが平氣で行はれてゐる。これは一方には大變美しいところもあるが、又これが非常に大きな弊害を作る原因となる。即ち彼等は自分の地位に安然としてゐる關係上互に競争せず、仕事の能率などについても考へず、高給を貰つて遊んでゐる、時には共同して惡事を働くといつたことが往々あり、これ等が會社の發達を防げ、一般からも歡迎されない原因となつてゐる。

合夥組織（組合組織）

合夥は支那に於ては最も發達せる企業形態で、別に合股、連財等とも稱せられ、日本の組合に相當するもので外國人はこれをパートナーシップと譯してゐる。即ち三人以上の者が、夫々その財力に應じて出資契約を定め、

議據（契約證書）を作製してそれには出資の額を明記し、更に利益金分配方法、及權限、暖簾（字號）、營業の種類、營業の場所なども明かにされてゐる。かくて營業は開始されるが支那の商店又は製造業者の招牌（看板）に某々協記、某々公記、某々會記等とあるは總てこの合夥組織を意味するものであるが、時としては公司なる名稱を用ひるものがある。

合夥組織の股東（出資者）は原則としては無限責任であるべきだが、併しその程度は政府公司條例による無限公司の社員が無限に連帶責任を負ふものとは異り、單に自己の持分に應じて各出資者が永久に無限の責任を負ふに止まり、從つて自己の責任を完ふすれば、責任は解除されることゝなつてゐる。

合夥組織の營業は普通我が國の支配人に相當する經理によつて開始されるが、經理はその股東出資者の中から選ばれることもあるが、或は有能練達の士を聘してやらせることもある。股東の多くは自ら業務の執行者となることを欲しないのが常である。この經理には出資者の組織した事業へ新しく聘用される者と、自ら發起人として出資者を勧誘して事業を成立させるものとがある。後者の場合には經理は股東を兼ねることとなる。經理以外の店員には副經理、夥計、小夥、學徒等がありこれを夥友と稱する。副經理は副支配人、夥計は所謂手代、小夥は夥計の見習、學徒は年期奉公の丁稚小僧である。支那では今日も尙徒弟制度が行はれ、徒弟期間は普通三箇年、この期間を學徒といひ、年期が終ると漸次小夥から夥計と昇進する。この制度は單に合夥組織のみならず個人組織に於ても同じことである、これ等使用人に對しては年度末に紅利（利益金の内から幾分を獎勵金として分配さ

れるもの)を與へ、これを通常花紅と稱する。而して、この合夥の持分を股份と稱し、總て持分は一時に拂込むことを原則とする。この股份は必ずしも現金を以て拂込まれず、商品或は動産によつて拂込まれる場合がある。成立した合夥を解散する時には出資者全體の決議によつて實行せられ、又出資者中の一人が脱退しやうとすればその持分を他人に譲渡し、出資者會議の承認を経て脱退することが出来る。股東は前述の通り業務の執行者でないことが普通であるが、合夥字號の外部に對する責任に關しては、その持分の額に應じて按分して永久に無限の責任を負ふ習慣がある。従つて、資本の多寡によらず、世間はその出資者の額觸れ如何によつて事業の信用程度を測定するのである。

合夥企業組織の決算は普通舊曆正月元旦から十二月末日に至る間を營業年度とするが、或は創立當時の規定によつて、開業の日から起算して滿一箇年を營業年度とすることがある。帳簿は必ずしも一定しないが、月末には小結、端午には紅賬、仲秋に收賬と稱して、小決算を行ひ、年度末に大結と稱して、損益結算を行ふ。

又利益分配の方法として官利、紅利の區別がある。官利とは即ち公約配當金の意にして營業の損益に拘らず、公約の率に従ひ出資者に配當する利息をいふ。つまり法定利子のこと、營業上利益あり、この中より諸の費用官利を支拂つて尙餘剩金があれば、更にこれを出資者に配當する。これを紅利又は餘利といふ。店員のボーナスもこの紅利の中から支拂はれる。

合 辦 組 織

通例性質を異にする二個以上のものが、一事業に對し共同出資をなし、共同して事業を經營する組織である。例へば支那で、政府と商民との共同經營事業を官商合辦と稱し、支那官憲と外國資本家との共同經營を官外合辦と言ひ、支那人と外國人とのそれは中外合辦と云ふの類である。

尙此の外に、既に營業をなしてゐる二個或は二個以上の事業家が競争を避け、有利なる成績を擧ぐるを目的として現状のまゝ共同聯合して營業する合辦の例もあるが、これは一種の「カルテル」に類したものである。

合辦組織は狹義の商業にはその例が少いけれども、若し支那の小商人が、邦人乃至外國人と共同出資して營業する者をも合辦と稱すべしとせば、普通所謂狹義の商業にも、その例が全然無いではない、併し大抵は鐵道、鑛山、銀行乃至工場經營などの、謂はゞ大資本、大規模の事業に於て多く行はるゝやうである。

業別による種類

支那には前にも述べし如く、古來三百六十行と稱せられた程、商業の種類は極めて多い。即ち小は道路閭巷に露店を開いて顧客を呼ぶものより、大は堂々たる店舗を構へ金色燦然たる招牌を掲げて内外の商品を陳列する大商店に至るまで、同じ零賣業（小賣業）といつても色々あることは我が國も同じである。この外、主として却賣をなす批發業又は生産者と商人と商人との間に立つて交易の媒介をなす媒介業等がある。外國との通商以來漸次新式の商業が試みられ、百貨店、信託業、取引所等も成立し、企業組織も漸次公司組織の行はれるやうになつたことは已に述べた通りである。

小賣商卸賣商に就てはこゝに説明を要しないが、媒介業には種々あつて、單に賣買の周旋をなすものを中人または掎客といひ、他人に代つて賣買を行ふ者を牙行と稱する。

支那の商法（商人通例、公司條例）は列舉主義によつて左記十七種の營業をあげてゐる。

賣買業、賃貸業、製造業或は加工業、電氣瓦斯或は水道の供給業、出版業、印刷業、銀行業、兩替業或は金貨業、信託業、作業或は勞務の請負業、湯屋を設けて客を集むる業、倉庫業、保險業、運送業、運送請負業、牙行、仲立業、代理業。

我が國の店舗は金物屋、呉服屋の如く、多くは何々屋、何々店と屋若くは店を用ひて呼んでゐるが、支那に於ては商業の種類によつて夫々稱呼を異にしてゐる。假令同じ商品を取ひながらも、大小の別、間屋と小賣り、場所の廣狹などで、店の稱呼が變つてゐる。例へば同じ呉服店にしても綢緞舗といへば普通の呉服屋、これが綢緞號とか綢緞莊になると大呉服店となり、綢緞行は呉服間屋といふことになる。その他支那に於ては商業の種類、性質、大小などによつて店、棧、廠、局、坊、館、園、樓、床、攤などを用ひてゐる。今その主なるものを舉ぐれば次の如し。

一 舗を附するもの

比較的小規模の商店をいふ。

眼鏡舗、綢緞舗（呉服屋）、布舗（太物屋）、成衣舗（仕立屋）、洋衣舗（洋服店）、帽舗、襪子舗（靴下製造販賣店）

估衣舗(古着屋)、洗衣舗(洗濯屋)、藥舗(漢方藥種商)、雜貨舗、書舗、古玩舗(骨董店)、掛貨舗(古物商)、席舗(蓆類の製造販賣)、燈舗(提灯屋)、煤舗(石炭小賣商)、鐘錶舗(時計店)、裱糊舗(表具屋)、點心舗(菓子屋)酒舗、當舗(質屋)、猪肉舗(豚肉屋)

(二) 號を附するもの

棧號(倉庫業で仲買人の性質があり、貨物の賣買仲買をも扱い、手數料を取る)。

銀號(舊式の銀行)

(三) 莊を附するもの

比較的大規模な商店をいふ。

緞莊(繻子店)、洋貨莊(洋品店)、牛羊肉莊、飯莊(料理屋)、茶莊(茶の間屋)、皮莊(毛皮問屋)
錢 莊

支那の舊式金融機關の代表的のもので、同業組合に加入せる組織比較的全然にして資本額の多きものを錢莊銀莊、銀號と呼び、同業組合に加入せざる小規模のものを錢鋪、錢店と云ふ。錢莊の最も大きいものを匯劃莊、次が排打、その次が零兌といふ。營業は預金、貸付、無記名式約束手形の發行、これを莊票といふ。尙手形の割引兩替、貨幣の投機賣買などを扱ふ。

票 莊

支那の商業及商慣習

支那國內爲替を本業とし、預金貸付などの銀行業務を兼ね匯兌莊ともいふ。

(四) 店を附するもの

皮貨店(毛皮店)、布店(木綿商)、棉花店、絨線店(毛糸店)、鞋靴店(靴屋)、南北貨店(南北支那物産を取扱ふ店で南貨店、北貨店と分れてゐるものが多い。又廣東物産を賣買する店を廣貨店といふ)

筆店、顔料店(繪具店)、紙店、南紙店、五金店(金物店)、玻璃店(ガラス商)、磁器店、鶏鴨店(鶏と家鴨を販賣する店)、糧食店(米、雜穀商)、客店(宿屋)、油漆店(塗物屋)、牙骨店(象牙と獸骨品商)、

(五) 行を附るもの

過載行(回漕店)

銀行、報關行(海關或は税關を通過する手續の一切を代行し、費用を立替へ、船車への積み卸しから倉庫保管までやる)。汽車行(タクシー業)、醃臘行(豚肉鹽漬問屋)

牙 行

牙行とは、一言にして云へば一種の間屋で滿洲等では發行家、中部支那では行棧等と稱し、行棧は普通倉庫業を兼ねてゐる。牙行の營業は客商の爲に自己の名を以て賣買を行ひ、一定の手數料を得る營業である、然らば客商とは何かといふに、土着せざる地方商人を云ひ、これ等の客商は自己の郷里からその土産品を運輸し來

つてこれを市場に買却し、更に所要の商品を仕入れてこれを郷里に携へ歸ることを目的とするものである。従つて彼等は同郷人の經營する牙行の周旋仲介によつて賣買を行ふものである。即ち牙行は客商の依託を受けて自己の名によつて賣買を行ひ、代金の取立、貨物の運送又は取次ぎ、通關の手續、税金の代納、或は倉庫を備へて貨物を保管し、或は客室を設けて客商を宿泊せしむる等總てこれを行ふ。これに對する佣金（手数料或は口錢）は地方によつて又商品によつて一定しないが、大體賣上金の二パーセント内外を普通とし、多くの場合賣手がこの佣金を支拂ふものである。

客商は大低同郷人の經營の牙行に投宿し、客商は同郷人を以て團體を組織して、一定の牙行に取引するを通例とする。従つて牙行と客商の關係は頗る親密である。而してこれ等同郷客商の團體を客幫といふ。

南方香港、澳門附近には九八行又は平碼頭平碼頭と呼び、又南北行といつて九八行とは幾分營業上の差異のあるものもある。

（六） 廠を附するもの

廠は元來工場といふ意味を有する。

汽車廠（自動車製造或は修繕工場から、自動車販賣などをも營む）、煉廠（石炭問屋）、車廠（各種の車製造販賣業）、紡紗廠（紡績工場）

（七） 局を附するもの

支那の商業及商慣習

鐘局（運送業と保険業を兼營するもので、陸路貨物を送る際、この店へ頼んで匪賊の難を免れる保険で、この店の紅い小旗を眼につくところへ立てゝ行けば、決して匪賊に襲はれることはないといふのは店と匪賊との間に了解がついてゐる）。書局（書店）、藥局（藥屋）、菸局（葉煙草販賣業）、寶局（賭博場）、果局（果物商）、首飾局（裝身具販賣店で、首飾樓、首飾店とも云ひ、指輪、首飾、腕輪などを商ふ）。

(八) 館を附するもの

飯館（料理屋）、戲館（劇場）、照像館（寫真館）、報館（新聞社）、書館（講談師の寄席又妓館を謂ふことあり）、煙館（阿片吸飲所）、雜耍館（手品師や其他の藝人の藝を見たり聞いたりする寄席）

茶館（喫茶店であるが、寄合集會所にも似て、唯一の娛樂談笑の機關となつてゐる）。

(九) 其他

皮坊（製革業）、染坊（染物業）、醬園（味噌、醬油製造販賣業）、澡塘（湯屋）、茶床（青物商）、茶園（一種の寄席でそこで茶を飲みながら、一堂に大勢の人が會し、講談を聞いたり音楽を聞いたりする所）

買辦について

買辦は歐米人は“Complador”と呼んでゐるが、支那に於ける獨特のもので、その機能は外國商人に代つて

支那人との一切の商取引に任ずるもので、各所屬會社、商館内に特に一室を所有して、代金及諸般雜費等を立替へ之に對して一定の手數料と利息とを得るを以て目的とする一種の仲介業とも稱すべきものである。

何故支那にかゝる特殊なものが發生したかといふに、元來支那は昔から鎖國主義をとつて、外國人の國內に入るを禁じてゐた爲、當時外國人の支那の國情に通ずるもの殆んどなく、近世に至り外國との通商貿易が行はれるやうになつてからも外國人は尙容易に支那の國情に通ずることが出來ず、貿易を營む上に非常に不便を感じたので、支那人の外國語に通じ且つ商務に熟達してゐる者を雇つて、之を代理として纔かに交易を行ふことが出來た。これが即ち買辦制度の抑々の始りで、爾來米人の支那で通商に従事する者は、擧つて此の方法を利用するに至り、買辦制度は非常な發達を遂げた。

併し支那も門戸開放以來已に八、九十年を経過し、各國人との通商關係も複雑となると共に外國人の支那の事情に通曉する者も増加し、且支那商人も外國人と直接取引する向も多くなり、従つて買辦の必要も減じかの如き傾向もあるが、しかしまた、買辦の勢力は大なるものがある。

次に買辦の資格であるが、買辦は其の職掌柄何れも支那人で外國語特に英語に通じ、支那の商取引慣習に練達せるのみならず、相當の財力を有し且つ一般社會に相當信用を有するものでなければならない。

前述の如く、買辦は外國人の經營する商社、銀行、汽船會社等には何れも附隨して、各種の外交的事務に當り、賣買の直接支配人の如き立場に在つて貨物の取引から苦力の使役までも扱ひ、又會計係としての業務もや

る。その業務は頗る繁雜である。しかし、買辦は單なる手代の如きものではなく、契約に従つて身元保證金を納め、一切委託者たる外國人の代理として働いてゐるので、従つてその収入も尠からざるものがあり、俸給としての百元、二百元は彼等の車代位のもので、彼等の主要なる収入はその手数料と立替金の利子である。尙この外雜多な利得が附隨するので高級な買辦の収入は極めて莫大なものであり、常に多數の部下を使用し、その生計頗る豪奢を極めてゐる。其の大商館にある者は、一ケ年の收入數十万圓に上るといふ。併し彼等は屢々市況の觀測を誤り、莫大な損失を招き破産する者も往々ある。

買辦の性質は大要以上の如きものであり、支那に於て圓滑に且つ迅速に交易を行はんとする場合大いにその必要を認めるが、しかし彼等を盛んに使用する時は徒らに彼等の權力を増大せしめ、動もすれば外人は買辦に左右せらる所となり、且又利益を壟斷せしむる結果となつて、對支貿易振興上餘り歡迎すべきものではない。日支貿易もこの事變を轉期として劃期的な進展を遂ぐべきは明かであるから、須く興亞の青年は永佳の目的を以て大陸に渡り、その地方の商業慣習に精通し、言語は固より、金融機關、各商店の營業取引狀況に至るまで詳細に研究し、之を習得し、直接彼等と交易して何等不便を感じざる迄に至らねばならないと思ふ。

商 業 團 體

支那には宛も歐洲中世のそれを思はしめるギルドの制が發達してゐる。それは支那の社會狀勢や政治形式が

自然にギルドの發達を促したものである。歐洲に於てギルドと云へば、マーチャント・ギルドとクラフト・ギルドとを聯想する程、此の二つの組合が重要視されてゐるが、支那では此等の外に同郷的ギルドのあることを閑却してはならない。それは支那に於ては郷黨の觀念深く、到る處で同郷の縁に沿ふてギルドを形づくるのみならず商人や手工業者のギルドも同郷團體の基礎の上に構成されたものが少くないからである。

元來支那人は其の宗族が繁榮し、郷黨が平和でギルドが安固であつて、生を樂しみ死を厚うするを得ばそれで満足するのである。宗族が漸次衰へ國家が未だ宗族に代つて之を保護することの出来ない支那に於ては、殊に郷黨を離れて異境に生を營む者にとり、ギルドが唯一の守護神であることは云ふ迄もない。支那のギルドは、何時の頃から始まつたものであるか未だ判明しない。然し周の宗法が既に衰へ、人々血縁の力だけでは生活が出来なくなつたので、六朝頃から唐宋に亘り、血縁のないものも利害や目的を同じやうするにより社又は會と名づくる組合を結び、互に相扶け合ふ風が漸次盛んとなつた。それで商工業者も亦職業を同じうするもの相聚り、こゝにギルドが生れたのである。支那ギルドの特色は、郷黨觀念の熾なことであらう。支那人は同郷の縁に沿ふて團體を組織することを常とし、彼の商工業者の如きも先づ同郷のもの相集つて同業的小ギルドを作り、ついで他郷のそれと聯合して全市の同業的大ギルドを作ると同時に、同郷を基礎とする各種のギルドが相結んで一大同郷團體の傘下に屬する。従つて支那ギルドは、單に職業上の利益を保護増進せんと計るに止まらず、共同の神を祀り吉凶禍福を共にし、相互相扶け合ひ、政府の干渉を受けず、自治を營むこと略々宗族や郷黨に類似してゐる。ギ

ルドにこの職能があるから、支那人が言語風俗の異つた他郷に出て、偏狹な土民の迫害や、貧慾な官吏の搾取に對抗して、生を楽しみ業に安んじ得るのである。彼等が滿洲、蒙古、新疆などの邊境の地のみならず、北は西比利亞から南は馬來半島に至る他邦に移住し、土民から凡有る産業を奪ひ、戸口年に繁殖し、盛んに活躍しつつあるのは實はこのギルドの恩惠によるところ尠からず、ギルドは支那人の社會生活に取つては極めて重要な機關となつてゐる。

支那固有のギルドを分つて會館と稱する同郷團體、公所と名づける經濟團體、公議會と稱する全市商工業者の混合的ギルドの三となすことが出来る。これ等のギルドは近世に至り、固より歐米資本主義經濟の輸入と共に大いにその影響を受け、或は之に改組を試み、或は外國の制を新らしく採用したものも多い。例へば支那政府は我が明治三十六年に商會即ち商業會議所を輸入し、強ひて公議會を之に改組せしめ、ついで公會即ち商工同業組合を輸入し、公所に代へんとした。民間でも亦、民主的同郷會を設立し、貴族的な會館に對抗せんとした。歐洲大戰後、世界的思潮となつた社會主義や共產主義が支那にも入り來り、被壓迫階級の共同戰線として、新に工會即ち勞働組合が生れ、中小農工商業者及び從業員を糾合して、商民協會及び農民協會などを創設し、公所、商會、公會などを排斥せんとしたが今日尙固有のギルドの制は依然として存續してゐるのみならず、支那の經濟組織としては極めて重要な地位にあるものであることを忘れてはならない。

會館には官吏を主とするものと、商民を主とするものと二種がある。官吏を主とするものは、吉凶禍福を共にし、情誼を溫める同郷團體に過ぎないから、その組織は簡單であるが、商民を主とするものは、同郷者の中に同業のものが別に幫と名づくる組合を形づくるものもあるから、その組織が複雑で種類も多い。

會館の設立は主として同郷者の誼を敦うせんとするものであるから、原則として同郷人の會館所在地に來住したものは、個人たると商人たるとを問はず、その會員となるものである。殊に官吏の如きは本人の意思如何に拘らず、來住したものは會員と見做されて寄附金を要求される。勿論苦力や無賴の徒は何れの場合でも會員と認められない。會館には夫々規約が定められ、その規約によつて役員が選任され重要な案件は凡て會議の決議を俟つて決行される。

會館は同郷人を以て組織するが、此同郷といふ範圍は頗る曖昧で、四川會館とか河南會館とか一省を以て區域としたものもあれば、天津會館、奉天會館などの如く、一都市を以て區域としたものもある。又海外に在るものは支那人全體を網羅し、中華會館と呼んでゐるものもある。要するに會員の共同の利益を圖り、相互の誼を敦うし、互に相扶け合ふことを以て、其本來の目的とせるもので種々の事業を經營してゐる。

會館は別に法律上特に規定されたものではないから、其設立に一定の手續を要しないが、通常其存在を公表する爲、又會館敷地に對し免稅の恩典に浴せんが爲地方官の認可を受ける。其會員たるものは同郷又は同業の關係上加入を強制するものではないが、普通自己の利害に關係することが大きいから必ず入會するを常とする。會

館は前述の如く、同郷出身官吏の相互扶助の爲に設立されてゐるものもあるが、多くは商工業者の團體である。此等の會館は其集會及諸種の附帶事業經營の必要上一定の建物を有し、而も其建物は規模宏大、設備華麗を極め中に劇場を有し廟を祀るものが多い。其附帶事業の重なるものは、商工業徒弟の養成及周旋、會員の孤兒寡婦の養育救済、傷病の施療等の外に失業者の救済、或は共同墓地や會員の屍を保管する爲に殯房を設ける等事業の範圍は極めて廣い。

會館には其事業を遂行する爲に會員の中より、董事、副董事等の役員を選任し、又庶務に當らしむる爲に司事といふ書記を雇用してゐる。會館に要する費用は、建物の改築、修繕其他臨時費は會員よりの捐銀即ち寄附金に依ることとし、經常費は會員の資力に應じ徴收したる會費及所屬財産の貸付料等の收入に依つて辨することにしてゐる。

會館は以上の如く同郷人を主體とする自治機關にして會員の團結力は極めて堅く、其勢力實に侮り難きものがある。官憲にして往々彼等に手をやくことがある。例へば法規、課税其他官憲の措置が苟も彼等の利益を侵害する場合等に、其團體的勢力を利用して之に反抗し、問題が重大なときには多數の會館を糾合してこれに當るので官憲も勢ひ屈服せしめられることさへ屢々ある。

公 所

前にも述べし如く、公所は商工業者の共同的利益増進を目的として組織する同業組合事務所を謂ふ。併し時と

しては鹽業會館と稱するが如き名稱を以てするものがあるが極めて稀である。

而してその名稱の孰れにもせよ公所は、中世歐洲に於けるギルドの事務所と見るべきもので、その内容は自由主義的な氣分に缺如し、寧ろ營業の自由が認められつゝある今日當然多少の改革を必要と認められてゐたが、國民政府は民國十八年（一九二九年）八月十七日工業同業公會法十六條を公布してその依據すべき所を示してゐる。右に依れば「同一區域内に在りて各種の正當なる工業又は商業を經營する者は均しく本法に據りて同業公會を設立することを得」（第一條）とあり、同じく第十五條には「本法施行前より存在する工商各業同業團體はその公所、行會、會館其他の名稱を用ふるを問はず、其の趣旨の本法第二條に規定する所の會館なるものは均しく本法により設立したる同業公會と見做し、並に本法施行後一年以内に本法に準據して改任せしむ」とあるを以てすれば、本法施行に於ける法律名稱は公會に改められた譯である。

公所の種類も多く、一々枚舉に遑のない位であるが、各公所毎にその規約を定め、これを施行せしむるの權あり。その規約の内容は區々にして一定しないが、略々類似した形式を備へて居り、即ち（一）開店に關すること、（二）役員、事務員に關すること、（三）徒弟に關すること、（四）同業者禁止に關すること、（五）度量衡、貨幣、商習慣に關すること、（六）會費に關すること、（七）會議に關すること、（八）訴訟に關すること、（九）制裁に關すること、（一〇）善舉に關すること、（十一）祭祀に關すること等が規定されてゐる。

公議會

支那の商業及商慣習

現在の商會（我が國の商業會議所）の前身にして商工業者の最も有力なる團體であつたが、光緒二十九年（一三〇九年）商會條令の公布せらるゝに及んでその名稱を商會と改められたものであることは前述の通りである。併し當時の公議會の權限範圍は單なる商工會議所の如きものでなく、彼の公所に比して、より廣き範圍に亘り常に該地方商人の利害を代表し會館公所の上に立つて全市商工業者の利益を擁護し、その弊害の排除に努め、一般商事の仲裁は固より天津のその如きは民事にまで及ばされた。

従つて官權が命令を商人に下さんとする場合は公議會の手を経て之を商人に傳へ、又商人が官廳に請願せんとする場合は、公議會に頼つて之を行ふといふ有様で、官憲と商人との連絡機關となつてゐた。

又支那の下級行政區劃は自治に一任されて居たものであるが、公議會の勢力の熾んとなるに従つて、遂には該市の橋梁、道路、河川修築、廟宇の修繕、貧民救助等に迄及び地方官に代つて家屋税、營業税、衛生費、警察費の徴收を行ひ、甚だしきに至つては、例へば營口、奉天のその如く、一時は警察事務をも掌り、内亂外患に際しては義勇隊を組織して市内の安寧秩序の維持にまで盡力するに至つたものである。

現に辛亥革命（一九一一年）後、民國となつてからも支那の商會が内治外交にまで干與するの風があつて、先進國の商工會議所と趣を異にするが如きもその歴史的影響によるものである。

支 那 商 慣 習

一、商 號 商號は屋號のことでこれを字號といつてゐる。先づ開業、開店の初めに當つて、所轄官廳に届け出で登録することになつてゐる。その店舗の商號は同業でなくとも同一のものをを用ふることは許されない。若し同一商號を用ひた場合は、古い商號の所有主より官廳に對し其取消しを要求し、又それよつて生じた損害の賠償を請求する權利が認められてゐる。

商號の名稱はみな縁起を祝つて吉慶の文字を用ゆるのが普通で、例へば錦泰昌、福昌祥などの如きものであるが、商號の頭には普通資本主又は經營者の姓を冠するのが多い。

二、使用人 支那商店の使用人は普通支配人に相當する經理（掌櫃的ともいふ）を最上として、その下に問屋とか大商店になると協理（副支配人）或は二掌櫃的を置いて店の仕事を統轄し、更に會計係として賬房（管賬的）を置くが、これは外賬（外賣勘定係）と内賬（店賣勘定係）と二つに分けて置く店もある。その下に櫃臺といふ來客應接係、外に普通夥計を店に應じて使用してゐる。夥計は一に同事とも謂ひ、日本の所謂手代に相當する店員で店の中堅として、働く戰鬪員である。普通商業の種類によつて内勤、外勤等の區別があり、殊に外勤に屬するものに跑衝なるものがある。彼等は當に市場に出入し、或は取引商店を巡廻訪問してその市況の検査を行ひ、これを主任し經理に報告し、又其旨を承けて實際取引を行ふ場合もあり、或は頗る重要な役目を有するものである。従つて彼等の多くは夫々商務に練達し、機敏なものが之に當ることになつてゐる。

夥計の下に學徒と謂ひ見習に當る使用人がゐる。即ち徒弟のことで幼童を保證人を立て、採用し、書算及業

務上の事を教へ、普通は三年年期、この間は無報酬、年期を終れば一人前の店員（夥計）として給料を支給される。

飯館、飯莊（共に料理店）の料理人を師傅と云ひ、男給仕を跑堂兒的、又は堂倌、女給仕を女招待といふ。店員の傭用、解職は普通舊曆の端午節（五月五日）と仲秋節（八月十五日）前後に行はれる慣習になつてゐる。勿論退職は自由である。

店主とこれ等の使用人との關係は最も密接であり、一切の營業の振不振はその使用人の良否にあるといつてもよい。使用人の進退手續と双方の權利義務に關しては各々營業の種類によつて夫々傳統された慣習はあるが、支那では商人通例で商店使用人の權利義務に關し明らかに規定してゐる。

使用人を雇ふには身元引受證を出させるのが普通でこれはその土地で商業上の信用ある人を保證人とすることが必要とされる。

三、賣買契約 賣買契約は正式な書類による契約が最も妥當な手續であるが、地方によつて、又商業の種類によつて夫々の習慣があり、何等證書を用ひず、單に口約だけのものもある。商人は信用を前提とするので口約だけでも大抵間違ひはないが、口約だけでは後日に萬一一方が、前約を履行しない場合、訴訟を提起しやうとしてもこれを證明する證據がなく不利に陥ることになるから、賣買契約はやはり證書にして置くのが安全である。尙賣買契約書には双方當事者の外更に立會人を必要とし、物品受渡しの日限、違約の懲罰、期限後の物品

交付の場合の懲罰、制裁其他必要な事項を明記して置くことなつてゐる。

支那では定銀(手附金)を交附して一旦賣買契約が成立した以上、その契約は必ず實行されなければならない。手附金を抛棄して契約義務の履行を怠るが如きは、彼等商人道徳上から見て不徳義千萬なものとされてゐる。斯うしたことを一遍でも爲した場合信用は全く零となる。即ち手附金を打つたる以上買主はこれを抛棄して解約を主張し得ないし、賣主も亦それを返還して取引を取消し得ない。山東省は此點について殊に嚴重である。預約取引も不履行の場合、湖北省には矢釜しい制裁が設けられてゐるが、何れの省にしても、支那には商業道徳が非常に發達し、而もこれが嚴重に行はれてゐることは、我國商人の大いに他山の石として學ぶべき點ではなからうか？

四、結 算 支那では數千年來陰曆を用ひて居り、陽曆を用ふることになつてゐる今日でも、尙商店を始め地方では依然として陰曆を用ひてゐるものが多い。結算其他の行事も多くはこの陰曆に據つてゐる。

支那商店の結算期は地方と業別によつて必ずしも一定するに至らないが、普通一年三回、即ち端午節(五月五日)、仲秋節(八月十五日)、年節(十二月晦日)である。以上三回の中でも年節を最重要視してゐるのは云ふ迄ないものが、之によらず月總或は月結といつて毎月勘定のもあれば、更に大商店間では年總(年結)若くは三年大賬と稱して一年に一回、三年に一回大結算をなす場合もないではないが、長期結算は今日殆んど行はれなくなつてゐる。

商品賣買の決済を金錢によらず、物品を代價として支拂ふことが今でも地方によつて行はれてゐる。例へば山西省大同府では、年三回の結算期を三限と云ひ、四月十五日、八月十五日、十二月十五日を結算期とし、百姓は商店から麥を買ふのに、矢張り收穫後に麥を倍額にして返還するといったことが行はれてゐる。

又蒙古貿易には代金の代りに馬や羊或は毛皮を以てする所謂物々交換式の決済方法もある。

燒鍋（燒酒釀造所）では毎年春夏に、造つた酒を地方へ賣り出し、秋になると酒代として郷民から糧食を取立てる習慣もある。

豚の賣買取引はすぐ現金を交付しないで、話が纏つてから七日後に代價を支拂ふ。若し七日以内に豚が死んだら、それを支拂ふに及ばないし、賣主も争ふことは出来ない。

紡績商取引では、未拂勘定一ヶ月以内は利息をつけないが、それ以上になると、一二分の利を加へる慣習である。

要

言

今次支那事變勃發以來邦人の支那大陸に進出するものの數は年と共に素晴らしい勢で増加し、北京、天津、漢口、南京、廣東等の大都市は申すに及ばず、如何なる僻遠の地と雖も苟くも日本軍の占領せる處には日本人の影響を感ぜざるなき迄に至つたことは洵に喜ばしい現象である。日支親善、これは單に口先許りでは決して實現される

ものではない。それは眞に理解ある兩國民の接觸によつて始めて可能である。而して、續つて靜かに在支邦人の發展の現狀を考察するに、果して眞に彼等はすべて日支親善乃至新支那建設の爲に貢獻しつゝありや？邦人の大陸發展は刻下の急務なるに拘らず、昨年に於ける邦人の渡支制限は何を物語るや？固より他に種々の原因はあつたことと思ふが、少くとも過去に於ける邦人の無制限入國が却つてこれ等の實現に支障を來す結果となつたことは明かな事實である。即ち眞に支那事變の意義を辨へず、聖戰の目的を解せず、事變のドサクサに乗じて、一攫千金を夢見て只漫然と出かけたものが如何に多かつたか？彼等の中には或は幸にしてその目的を達したのもあらう、しかし彼等の大多數は事志と違ひ、生活の道を失ひ、遂に出先官憲の厄介になる許りでなく、皇軍の貴き血と肉とで築き上げつゝある新支那建設を一方から破壊しつゝあつたではないか？如斯狀態では今後如何に日本人の進出が盛んになつても決して歓迎すべきではない。寧ろ百害あるのみである。我々は今徒らに個人の利益のみ追求すべき時ではない。東西新秩序建設の責任者として又東亞諸民族の指導者としての責任は極めて重大である。今後支那に對しては過去の經緯に拘泥せず、善隣友好、共存共榮の原則の下に出發すべきだと思ふ。我國人の經濟的進出も必ずこの線に沿はなければならない。これには眞に支那及支那人を理解し、眞面目な目的と鐵の如き堅き意志とを有する青年の進出が何より肝要である。

現在皇軍の占領地域内に於ける邦人の商賣といへば、飲食店、小料理店、カフェーなどの如く、殆んど水商賣に限られてゐる。而も固より邦人を對照してのものである。現在のやうな過渡期にはこうした商賣も已むを得な

いが、果してこれは永久性のある健全な發展といへるだらうか？。今後に於ける邦人の發展は單に邦人相手のみならず、支那土着の民衆を對照としもつと健實な商業を選ぶべきである。しかし乍ら、支那人相手といふことになると勢ひ、支那商人との競争は免れない。ギルドが發達し、而も商才に長け、安價な生活に安んずる在支那商人と競争しては果して勝味あるや？甚だ疑問とする所であるが、その資本に於て、その技術に於てその經營の方法に於て、又商業の種類によつて彼等を抑へることは必ずしも不可能でないと思ふ。こゝに我々大いに一考を要する問題があると思ふ。要は我が國人がもつと支那を研究し、より理解を深めることによつて、この問題は自ら解決されるだらう。

(昭和十六年二月一日)